

楠目遺跡発掘調査報告書

1988年3月

土佐山田町教育委員会

序

旧跡で名高い畿内地方はもとよりのこと、最近は、全国にわたって古代史跡の発掘調査が盛んに行われるようになったことは、我国の文化の独自性を探り、その普遍的な価値を更に発展させるために、誠に喜ばしいことであると思います。

本町でも、新改古墳の発掘以来、多くの遺物遺構の調査を行い、縄文に始まる古代史の輪郭をはの見える程度にできていますが、今度また、楠目小学校新校地の調査によって新しく長い年代にわたる遺物遺構が発見され、これまでの成果を一層裏づける資料を得たのでありまして、その意義の深さを味わっているところであります。

校地造成のリミットもあって、真夏の炎天下にも憩のいとまもなく、強行軍の作業を続けて戴いた 県教委文化振興課の先生方を始め ご関係ご協力を戴いた方々に、衷心より感謝申し上げる次第であります。

終りになりましたが、本報告書を作成して戴いた 山本哲也先生に重ねて厚く御礼を申し上げまして 発刊のご挨拶と致します。

昭和63年 3 月

土佐山田町教育委員会

教育長 坂 本 敏 夫

例 言

1. 本書は、土佐山田町教育委員会が昭和61年度に実施した、楠目小学校移転改築工事に伴う発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、土佐山田町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の指導を得て実施した。発掘調査は、昭和61年7月10日から7月21日までの間に実施し、高知県教育委員会文化振興課社会教育主事高橋啓明、主事森田尚宏、主事山本哲也が担当した。
なお、昭和62年度において出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書の作成を行った。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図は国土院発行20万分の1（高知）、2万5千分の1（とさやまだN1-53-28-7-1）を複製使用し、第2図は2,500分の1の高知広域都市圏6・7を、また第3図は、1,000分の1地形実測図を複製使用したものである。なお、方位は方眼北（G、N）とした。
4. 遺構平面図及び発掘区位置図の方位は磁北とし、レベル高は海拔高度で、単位はメートルによるものである。なお、遺物実測図は½縮尺に統一した。
5. 本書の編集及び執筆は山本哲也が担当した。
6. 今回の発掘調査については、地元関係者をはじめ多くの方々の御協力をいただいた。文末ではあるが、関係者各位に厚くお礼申しあげたい。

目 次

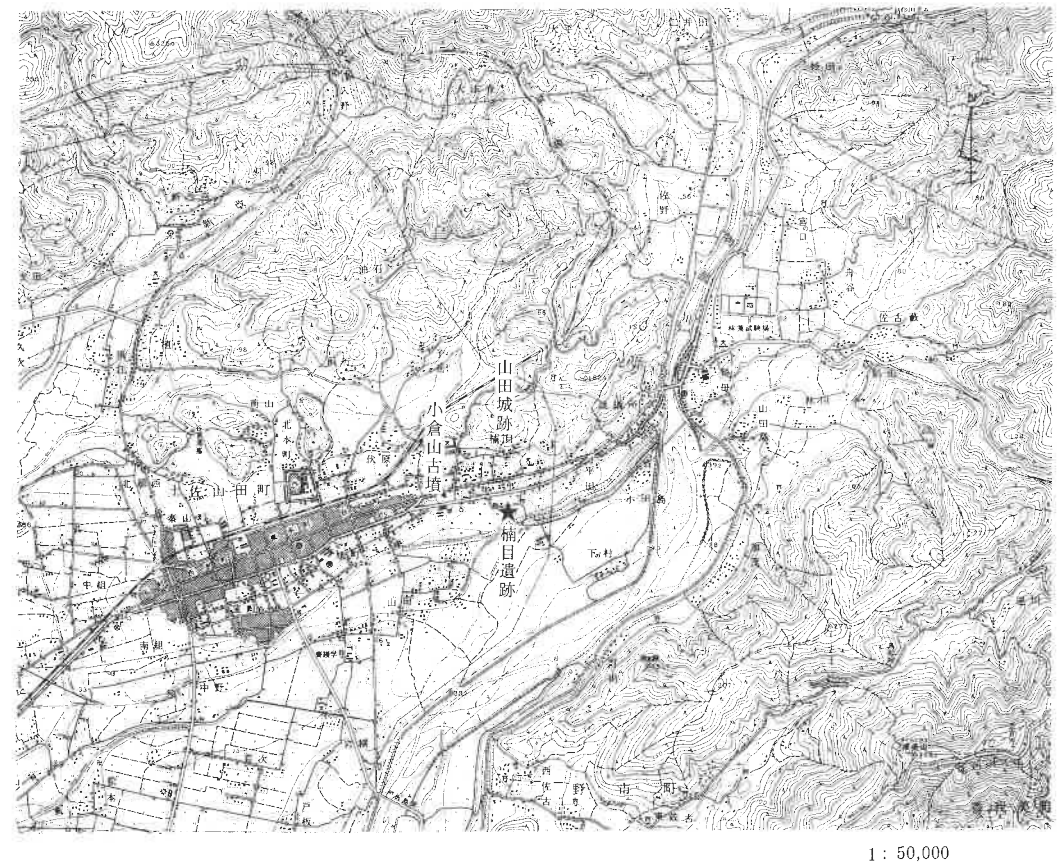
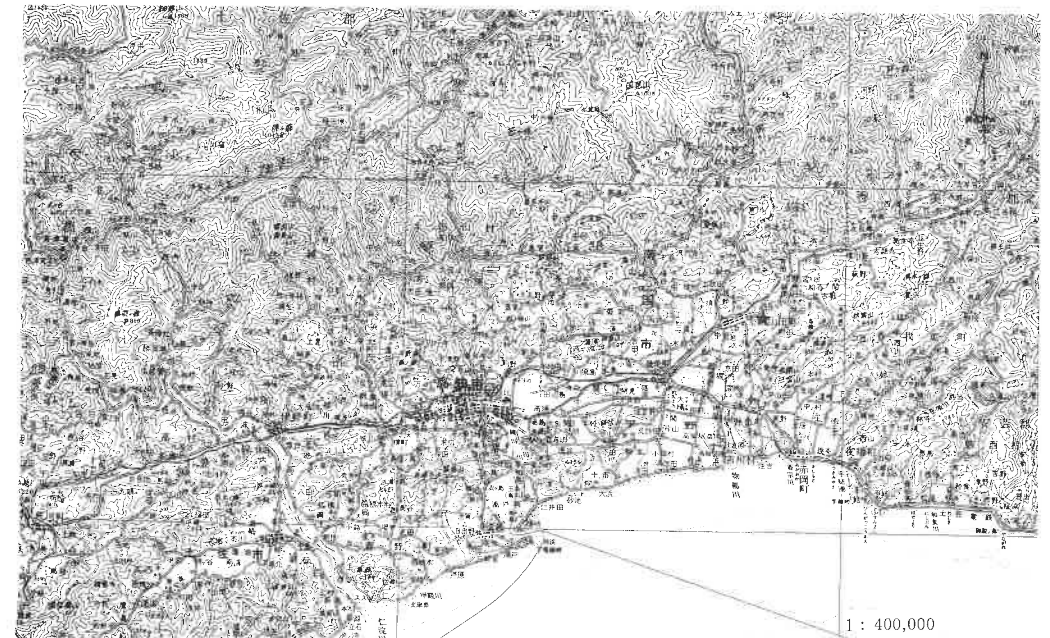
I 調査に至る経緯と経過	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の概要	3
1. 調査の方法	3
2. トレンチ調査の概要	3
IV 検出遺構	7
V 出土遺物	12
VI ま と め	16

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置
第2図 楠目遺跡と周辺の遺跡
第3図 トレンチ配置図
第4図 トレンチ土層断面図
第5図 T-9、10遺構平面図
第6図 T-11遺構平面図
第7図 出土遺物実測図
第8図 出土遺物実測図

図 版 目 次

- P L.1 T-10 (北から)
- T-9 遺構検出状態 (南東から)
- P L.2 T-9 遺構検出状態 (北東から)
- T-9 完掘状態
- P L.3 T-11調査風景 (北から)
- T-11遺構検出状態 (北から)
- P L.4 T-11調査風景 (北から)
- T-11調査風景 (北西から)
- P L.5 T-11井戸跡検出状態 (西から)
- T-11東側 (北から)
- P L.6 T-11SB-1 (西から)
- T-11全景 (北西から)
- P L.7 T-3 (北から)
- T-4 (北西から)
- P L.8 T-5 (北東から)
- T-8 (南から)
- P L.9 T-12・T-16 (北西から)
- T-12 (北東から)
- P L.10 T-12 (南東から)
- T-14 (東から)
- P L.11 T-15 (南東から)
- T-16 (南西から)
- P L.12 出土遺物



第1図 遺跡の位置

I 調査に至る経緯と経過

土佐山田町では、校舎の老朽化が進んだ町立楠目小学校について、新たに整備、充実化を図るために、土佐山田町楠目字下タヤシキ、字ヤカシラに移転先をもとめ、昭和62年3月完成をめどに同校の改築工事が昭和61年7月1日から開始されていた。

工事対象地はこれまで遺跡所在地として把握されていなかったが、昭和61年7月2日に工事中において弥生土器片等が発見され、遺跡が所在することが確認された。このため、土佐山田町教育委員会は高知県教育委員会と協議を実施した結果、遺物包含層及び遺構の所在を確認したうえ当該工事との円滑な調整を図るために試掘調査を実施することになり、昭和61年7月10・11日に遺物発見地周辺に計11ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。

試掘調査の結果、3ヶ所のトレンチから奈良時代～平安時代、江戸時代に属する遺物が出土し、柱穴、溝跡、ピット、不整形土壇、井戸等が検出されて、遺構が所在することが確認された。工事対象地から遺構が検出されたことに基づき、本発掘調査が必要であると判断されたため、土佐山田町教育委員会では、高知県教育委員会、土佐山田町総務課、楠目小学校、工事施工業者等と再度協議を実施し、遺構が検出されたトレンチを中心として緊急発掘調査を実施することになった。

調査は、昭和61年7月12日から7月21日までの間に実施した。調査地の地番は、土佐山田町楠目字ヤカラシ302ー2番地外で、総発掘面積は950㎡である。

II 遺跡の位置と環境

楠目遺跡は、土佐山田町楠目字ヤカシラ202番地外に所在し、高知平野北東端部にあたる長岡台地（古期扇状地）の段丘平坦部に位置している。

土佐山田町は、南国市と共に高知平野の大半の面積を占めているところから、県内有数の遺跡分布地であり、楠目遺跡周辺の長岡台地上にも多くの遺跡がみられる。⁽ⁱ⁾

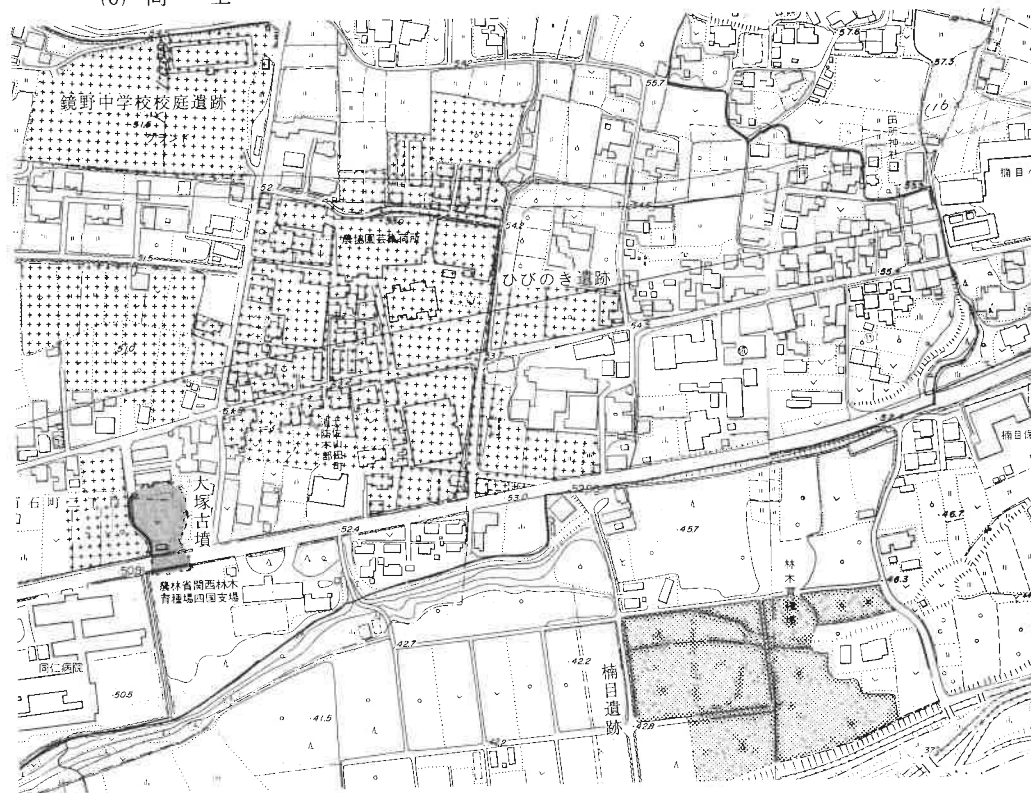
周辺の遺跡としては、鏡野中学校校庭遺跡、ヒビノキ遺跡、大塚古墳、小倉山古墳、山田城跡等が所在することが知られている。鏡野中学校校庭遺跡は、弥生後期前半～後期の遺物散布地で、これまで壺、甕、高杯、器台等の土器片が採集されている。また、ヒビノキ遺跡は弥生時代後期中葉～古墳時代前期の集落跡で、これまで4次にわたる発掘調査が実施されており、住居址、土壇墓等が検出されている。この遺跡は、鏡野中学校校庭遺跡と一連の遺跡であると考えられるもので、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての広範囲な集落跡として捉えることができる。

大塚古墳は、全長40～45mを測る前方後円墳で、昭和52年に行われた発掘調査により、竪穴式石室と推測される埋葬施設が確認され、多量の須恵器、金銅製杏葉、玉類、鉄刀子、鉄鏃などが出土している。標高45m前後の平地に築造されており、出土遺物から見て6世紀初頭～前半頃のこの地域の首長墓であったことが考えられる。また、小倉山古墳は南西に開口する横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳で、かがみの学園前古墳等と共に伏原古墳群を形成している。⁽⁴⁾

山田城跡は、戦国時代土佐の七守護（本山、安芸、大平、山田、津野、吉良、長宗我部氏）のなかの⁽⁵⁾一豪族であった山田氏の居城である。城跡は標高122.3mを測る丘陵平坦部に詰を構え、南側の標高116.2mを測る平坦部には堀切をはさんで二ノ段が、また、二ノ段西側の標高100.4mを測る丘陵平坦部には郭が設けられている。城跡の所在する丘陵上には、堀切、縦堀、土塁、帯状の郭などがみられる。山田氏の居館については、『長宗我部地検帳』の記載から、城跡南側の山下に所在していたことが推測され、現在の土地の小字名にも、城、居館等に関連した地名が残されている。

⁽⁶⁾楠目遺跡周辺の歴史的環境としては、上記のように弥生時代後期から広範囲な集落が形成され、古墳時代後期に至っては大塚古墳の築造にみられるように地域的な豪族の成立が認められる。また、戦国時代では、山田城跡を中心として、山下に城主の居館、家臣の屋敷等が並び、市町がつくられていた。このように、楠目遺跡一帯は長岡台地上に形成された遺跡群のなかでも拠点的中心集落としての性格を有しており、各時代の地域的動向を探るうえでも注目される地域である。

- 註 (1) 廣田典夫 「原始の山田」『山田町史』 1980年 土佐山田町
(2) 岡本健児、廣田典夫 「ひびのき遺跡」 1976年 土佐山田町教育委員会
(3) 廣田典夫 「古墳時代の山田」『山田町史』 1980年 土佐山田町
(4) 同 上
(5) 前田和男 「中世の山田」『山田町史』 1980年 土佐山田町
(6) 同 上



第2図 楠目遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ 調査の概要

1. 調査の方法

試掘調査

工事対象地の北側部分で、杉木及び耕作土の除去作業中に排土から弥生土器片等が発見されたため、遺物出土地周辺に計4ヶ所のトレンチ（T-9～10の一部、16）を設定し、遺構等の確認調査を行った。また、遺跡の範囲を明確にすることを目的に、工事対象地の南側部分に7ヶ所のトレンチ（T1～7）を設定して調査を実施した。

調査の結果、T-9～11の各トレンチから柱穴、溝、ピット等の遺構が検出され、遺物が出土した。なお、T-1～7・16の各トレンチでは遺構、遺物包含層の所在は確認されなかった。

T-9～11から遺構が検出されたことから、工事対象地の北側部分に遺構が形成されていることが明らかとなり、当該工事に伴う本発掘調査が必要となった。

本発掘調査

当該工事計画では、校舎建築地は調査対象地の北端であり、その他の部分は運動場等となることから、T-9～11を拡張したうえ新たにT-8・12～15・17～19を設定し調査を実施した。

各トレンチは任意の方向に設定し、重機（ユンボ）を使用して耕作土等の排土を除去した後、人力で遺構の検出作業を実施した。なおトレンチは、試掘調査時に設定した計11ヶ所のトレンチと併せてT-1～19の名称を冠した。

本発掘調査では、T-8～11の各トレンチから遺構が検出されたが、T-12～15、17～19では遺構及び遺物包含層は検出されなかった。

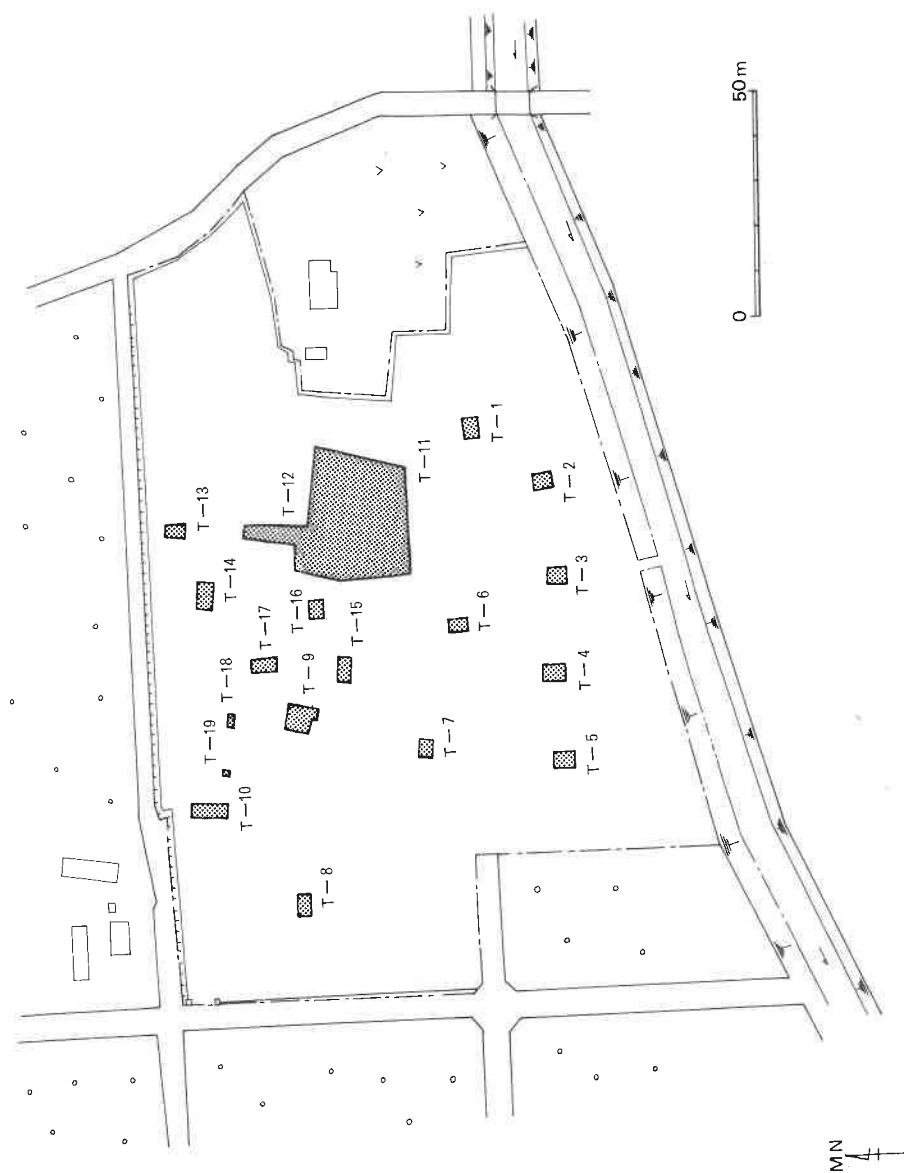
2. トレンチ調査の概要

T-7

調査対象地の南側に試掘調査時に設定した発掘区である。調査範囲及び発掘面積は以下のとおりである。

T-1（5m×3.5m・17.5㎡）、T-2（4m×3.5m・14㎡）、T-3（4.5m×4m・18㎡）、T-4（5m×4m・20㎡）、T-5（5m×4m・20㎡）、T-6（4m×3m・12㎡）、T-7（4m×3m・12㎡）

基本層序は、第Ⅰ層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘礫土、第Ⅲ層茶灰色礫土である。第Ⅲ層は、標高42.80～43.30mの間で検出され、全体的に南西方向へ傾斜して堆積していることがうかがわれた。比高差は、T-7、T-5間で約50cmを測る。各トレンチからは遺物は出土せず、遺構も検出されなかった。



第3図 トレンチ配置図

T-8

調査対象地の西端に設定した長さ5m幅3mのトレンチである。基本層序は4層に区分され、第Ⅰ層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層黒褐色粘質土、第Ⅲ層暗黒褐粘質土、第Ⅳ層明茶色粘砂土である。表土下80cmまで掘削したが、T1～7でみられた茶褐色粘礫土、茶灰色礫土の堆積は認められなかった。なお、トレンチ北壁ぎわでは、第Ⅲ層上面から掘り込まれたピット状の落ち込みがみられ、褐色粘質土が堆積していた。このピット状の落ち込みは、径38～40cm、深さ25cmを測るもので、時期、性格等は不明であるが遺構と考えられるものである。

T-9

長さ6m幅5mの発掘区で、本発掘調査時に1m×3mの範囲を拡張した。層序は、5層に区分される堆積土がみられ、第1層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘礫土、第Ⅱ'層茶色粘礫土、第Ⅲ層淡茶色粘礫土、第Ⅳ層茶灰色礫土である。第Ⅲ層上面で、ピット、不整形土壌等が検出されたが、出土遺物は細片の土器片であり、遺構の性格、形成時期については不明である。

T-10

調査対象地の北西部に設定した長さ8m幅3mの発掘区である。基本層序は、第Ⅰ層表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘礫土、第Ⅲ層茶灰色砂礫土である。第Ⅱ層から掘られた井戸、溝を検出した。溝の埋土は黒灰色粘質土、茶灰色粘質土で、埋土中から近世陶磁器の細片が出土したことから、江戸時代に属するものと考えられる。また井戸は、1.40m画の方形の掘方をもつもので、深さは20cmを測り、20～30cm大の河原石が集中していた。

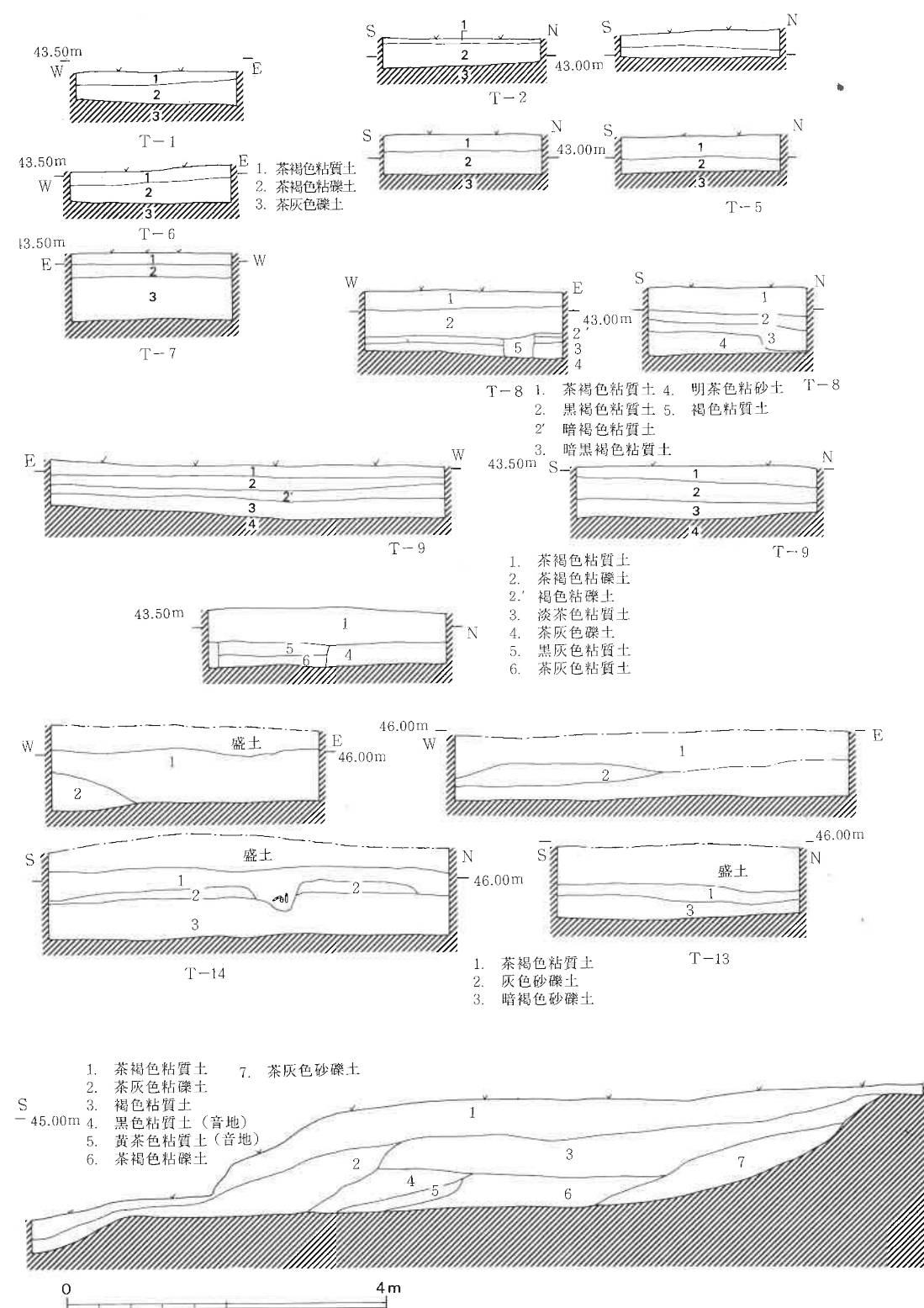
T-11

試掘調査時に長さ5m幅2mのトレンチを設定し、本発掘調査において拡張した。発掘面積は630㎡を測る。基本層序は、第Ⅰ層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘礫土、第Ⅲ層茶灰色礫土である。第Ⅲ層上面において、柱穴、ピット、井戸等が検出された。また、第Ⅱ層中から弥生時代、古墳時代、奈良時代～平安時代、戦国時代に属する遺物が出土した。

検出された遺構は、掘立柱建物址2棟、柵列1、井戸1、柱穴、ピットであり、遺構の検出状態からみて、発掘区の東側にかけて遺構の広がりがあるものと推測される。

T-12

T-11から北側にかけて延長した長さ11m幅4mの発掘区である。7層に区分される堆積土が認められ、第Ⅰ層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶灰色粘礫土、第Ⅲ層褐色粘質土、第Ⅳ層黒色粘質土、第Ⅴ層黄茶色粘質土、第Ⅵ層茶褐色粘礫土、第Ⅶ層茶灰色砂礫土となっていた。このうち、第Ⅰ、第Ⅱ層中からは近現代の陶磁器片が出土し、かく乱土の強い堆積土であることが判明した。また、第Ⅵ層はT-11の第Ⅱ層に類似し、第Ⅶ層は南側へ約23°の勾配で傾斜して堆積していることが認められた。



第4図 トレンチ土層断面図

T-13・14

T-13・14は、学校校舎建築地に設定した発掘区であり、T-13は長さ4m幅3mの南北方向のトレンチ、T-14は長さ6m幅4mを測る東西方向のトレンチである。T-13・14の堆積土は3層に区分されるもので、厚さ30～50cmの盛土（褐色砂礫土）下に、等Ⅰ層茶褐色粘質土、第Ⅱ層灰色砂礫土、第Ⅲ層暗褐色砂礫土が堆積していた。T-13・14からは、遺構及び遺物包含層の所在は確認されなかった。

T-15～19

T-9～11周辺に設けた発掘区で、調査範囲及び発掘面積は以下のとおりである。

T-15（6m×3m、18㎡）、T-16（4m×3m、12㎡）、T-17（6m×3m、18㎡）、T-18（3m×1m、3㎡）、T-19（2m×1.5m、3㎡）

T-15～19からは、遺構及び遺物包含層の所在は確認されなかった。このため、T-9～11で検出された遺構に関連するものはみられず、T-11で検出された遺構は、発掘区の東側に形成されているものと考えられる。なお、T-15～19の堆積土は、T-10・11と同様に3層に区分されるもので、第Ⅰ層が表土で茶褐色粘質土、第Ⅱ層茶褐色粘礫土、第Ⅲ層茶灰色砂礫土であった。

Ⅳ 検出遺構

T-8～11において、掘立柱建物北、棚列、井戸、溝、不整形土壇、ピットが検出された。主要遺構の内容は次のとおりである。

掘立柱建物址

SB-1

桁行6間梁間2間の東西棟の建物で、間仕切をもつ。T-11の第Ⅲ層上面で検出された。

桁行は総長約12.8m、梁間は約4.15mを測り、棟方向はN-6°-Eでほぼ真東に向いている。柱穴の掘方は、40～50cm×70～80cmを測る方形の掘方であるが、規則性はなく不揃いである。

SB-2

桁行4間梁間2間の南北棟の建物で、桁行の総長約6.9m、梁間は約4.9mを測る。SB-1の東側で検出された。棟方向はN-11°-Wである。柱掘方は60～70cm画の方形の掘方と、径60cmを測り楕円状を呈する掘方等がみられ、規則性はなく不揃いである。柱心間の距離は、桁行で1.8m等間隔、梁間で1.5m等間隔である。

棚列

SA-1

SB-1とSB-2の間にみられる南北方向の棚列で、主軸はN-7°-Eであり、SB-1に伴う目隠塀であると考えられる。柱間距離は、1.7～2.4m間におさまリ、均等性はない。柱穴の掘方は、径60cmを測る楕円状のものと70cm画の方形を呈するものとがみられる。

井戸

SE-1

T-11のSB-2北西隅で検出されたもので、径1.3mを測り楕円状を呈する。井戸の底部が遺存したもので、径20~30cm大の河原石が二、三段積まれた状態で検出された。検出面から井戸基底面までの高さは約63cmを測る。

SE-2

T-10から検出され、1.40m画の方形の掘方を有する。検出面から基底面までは20cmを測り、上部は後世の削平によって消失している。掘方内に20~30cm大の河原石の集石がみられることから、素掘りの井戸を廃絶後埋め戻したものと推測される。SE-2の南西端は、SD-1につながり、SD-1の埋土中から近世陶磁器の細片が出土していることから、SE-2はSD-1と同様に、江戸時代に掘られたものと考えられる。

溝

SD-1

SE-2の南側で検出された小溝で、幅35~50cm深さ約7cm検出長2.6mを測る。埋土は黒灰色粘質土、茶灰色粘質土で、黒灰色粘質土中から細片の近世陶磁器片が出土した。SD-1は、SE-1に伴う導水用の溝として機能したことが考えられる。

不整形土壌

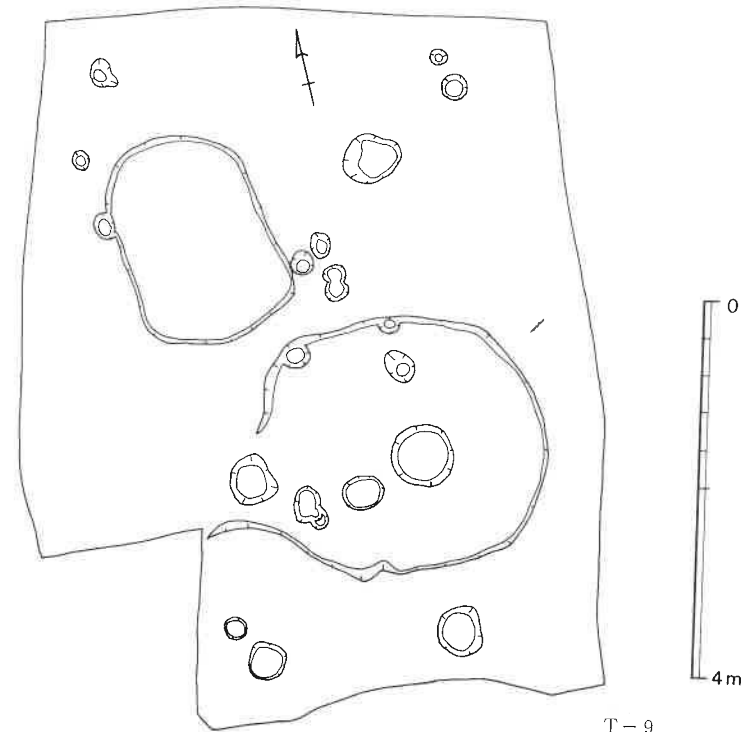
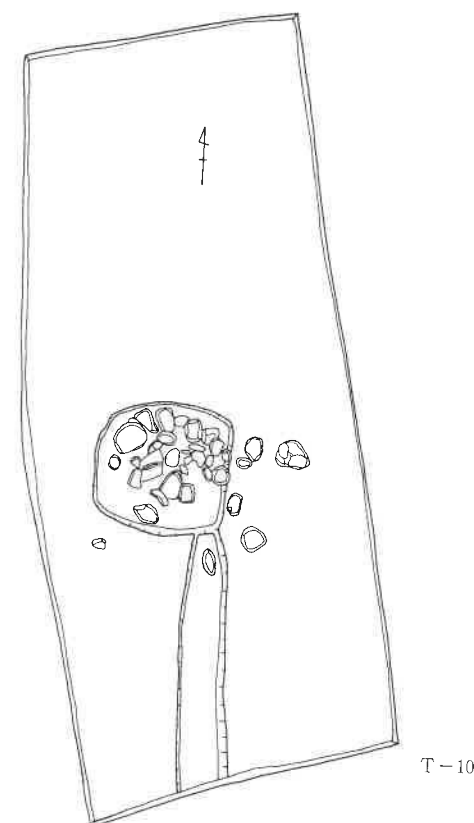
T-9から検出された。1.6m×2.3mの楕円状を呈し深さ8~9cmを測るものと、浅い楕円状を呈し、2.7m×3.0mを測るものが認められた。土壌内の埋土は、何れも褐色粘質土であった。埋土中から細片の土器片が出土したが、所属時期は不明である。

柱穴・ピット

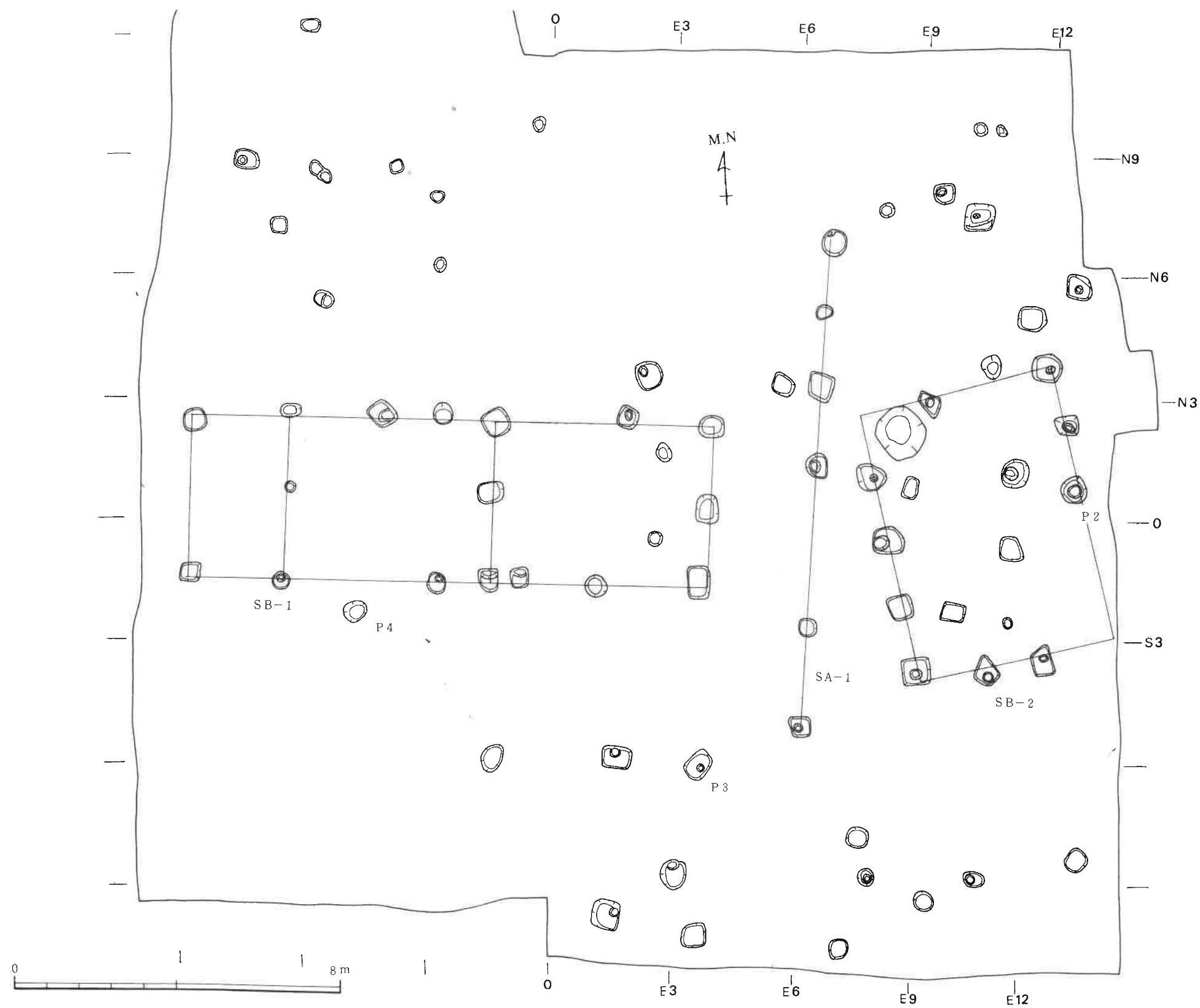
T-8~11において検出された。T-8~10で検出された柱穴、ピットについては、伴出遺物がなく、遺構の形成時期、性格については不明であるが、T-11の柱穴、ピットのうち、P1-4においてピット中から遺物が出土し、遺構の形成時期が明確となった。また、T-11の柱穴、ピットのうち、SB-1の南側で検出された柱穴、ピットは、掘立柱建物の一部である可能性をもつ。

P1~4から出土した遺物は次のとおりである。P1（土錘、図-7）、P2（土師質土器杯、図-10）、P3（土師質土器、図-9）、P4（白磁小杯、図-11）

出土遺物の内容から、SB-1は奈良時代末~平安時代前半に、SB-2は戦国時代に形成されたものであると考えられる。



第5図 T-9・10遺構平面図



第6図 T-11遺構平面図

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の内容は以下のとおりである。

弥生土器 壺、甕、鉢、高杯

土師質土器 杯

須恵器 小壺

輸入陶磁器 青磁・碗、白磁・小杯

土師器 甕、甗

石器、土錘、土製品 砥石、

遺物は、T-11からの出土数が極めて多く、T-9、10からは図化不能な細片の土器、近世陶磁器片が出土しただけであった。

弥生土器 (図7-2~6)

壺(6)は、球形を呈する胴部をもち、下胴部に縦方向のハケ調整を施しているもので、内面は胴部下半に縦方向のヘラ削り、胴部上半に横方向のヘラ削りがみられる。鷹(4.5)は、胴部下半に縦方向のハケ調整を施し、内面に縦方向のヘラ削りがみられるもの(4)と、底部外面に指頭による圧痕を施し、内面をヘラ削りしているもので、ともに安定した平底をもつ。鉢(3)は、浅く開く体部に粗雑な底部を貼付したもので、口径12cmにくらべて器高は5.3cmを測る。高杯(2)は、杯口縁部の破片で、口縁部と杯部の境には稜をもち、内外面にヘラ磨きを施す。色調は、内外面とも明茶褐色を呈し、胎土は精製されている。形態、手法からみて搬入品と考えられるもので、瀬戸内系の土器である。

2~6は、弥生時代後期後半~末に所属するものと考えられる。

須恵器 (図8-8)

口径8.0cmを測る短頸の壺である。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。胴部上半に一条の沈線を施す。内外面とも回転ナデ調整を施す。古墳時代後期(7C初頭~前半)に属するものと推測されるが、胴部下半を欠損しており、全体の形状は不明である。

土師器 (図8-13~15)

14・15は口径22cm前後を測り、やや外反して立に上がる。口縁端は丸くおさめる。体部下半を欠損しており形状は不明瞭であるが、甗として考えられるものである。内外面にハケ調整を施した後、すり消している。13は甕で、胴部以下を欠損している。口縁部は強く外反し、端部は丸い。

土師質土器 (図8-9・10)

杯底部片で、回転糸切りによるものである。1~2mmの小砂粒を含む。戦国時代(15C後半~末)に属するものと考えられるもので、T-11のピット及びSB-2の柱穴から出土した。

青磁 (図8-12)

碗底部である。胎土は灰色で精微、釉は透明度のある薄緑色で、高台は断面台形の削り出し高台である。内底には毛彫りによる文字を線刻する。

白磁 (図8-11)

小杯であり、T-11のピット中から出土した。高台は削り出しによるもので、断面台形を呈する。釉は白濁色である。

土錘 (図7-7)

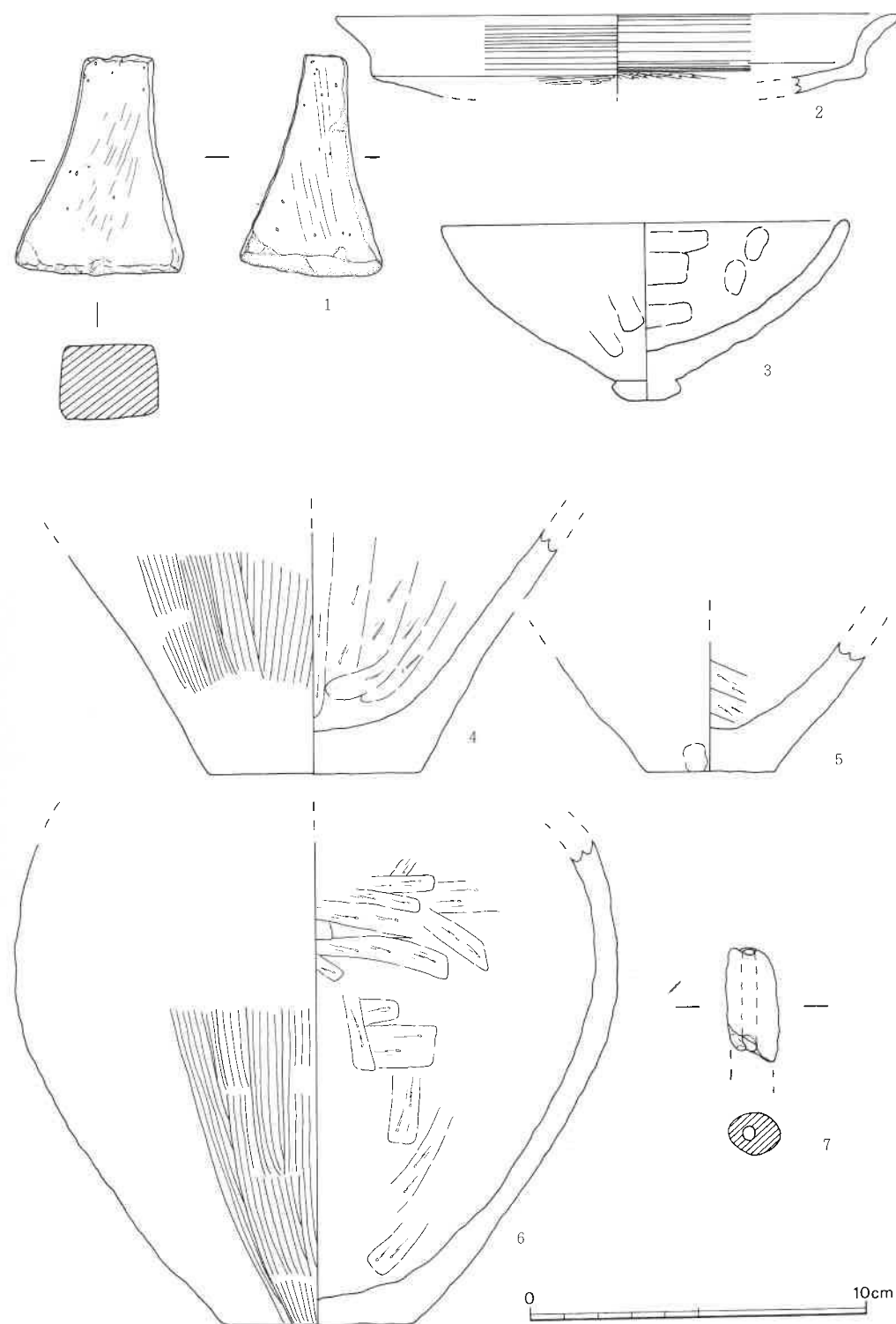
S B-1の柱穴内から出土した。幅1.5cm残存長3.4cmを削り、淡赤褐色を呈する。

砥石 (図7-1)

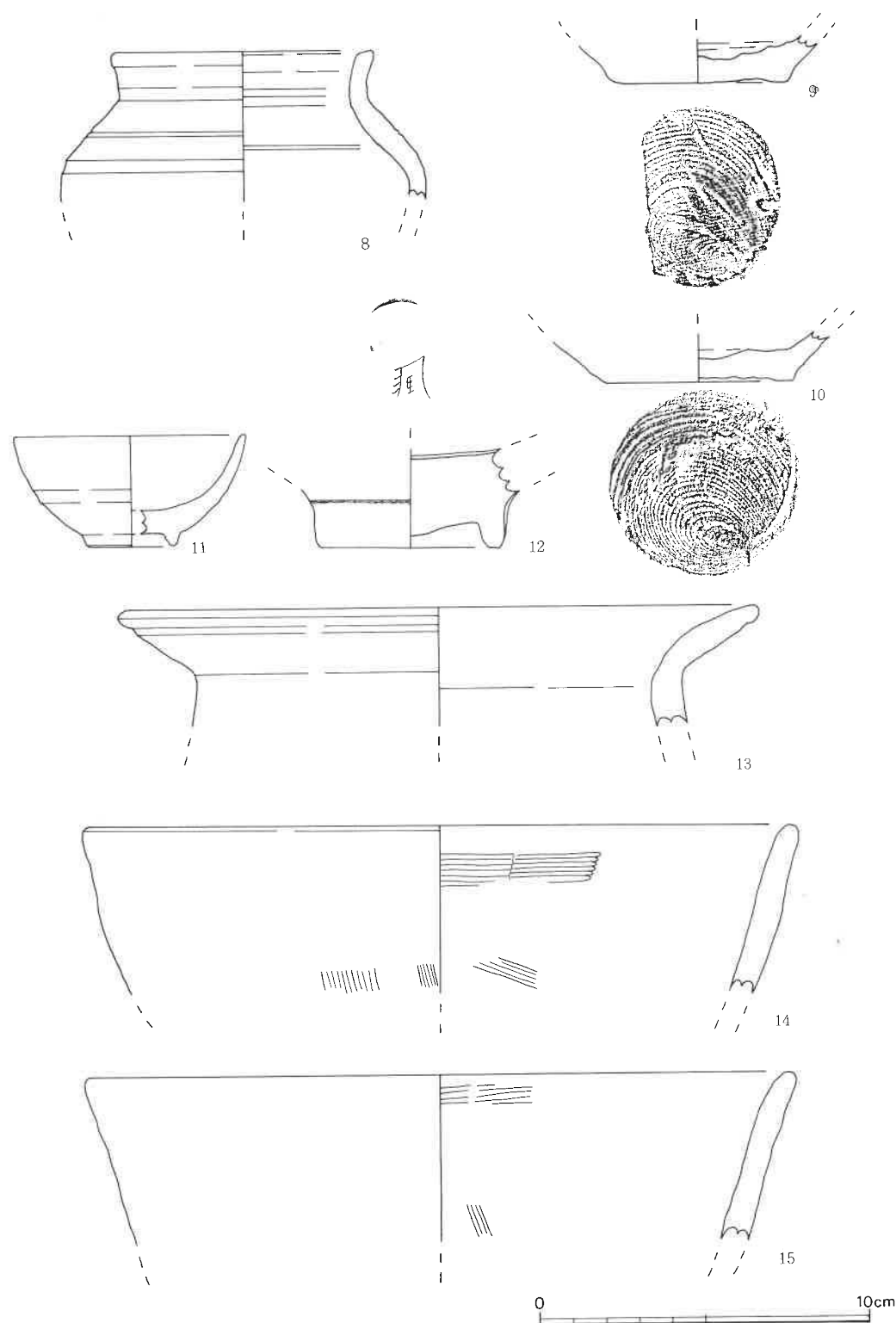
断面台形の砂岩製の砥石で、両端を除く四側面が使用されている。長軸方向に対して斜方向の擦痕が認められる。

出土遺物観察表

図番号	名称	器種	出土層名	口径	器高	口方向	焼成	胎土	色調	備考
7-1	砥石		茶褐色 粘礫土						明黄茶色	砂岩、両側面に使用痕が残る。
7-2	弥生土器	高杯	"	17.0cm	2.4cm 以上		良好	0.1~2mm の砂粒を 含む	内外面とも 赤褐色	搬入品か。上東式土器に類似
7-3	"	鉢	SB-1 上部	12.0cm	5.3cm		"	小砂粒を 含む	内外面とも 橙色	
7-4	"	甕	"	底径 6.4cm	7.3cm 以上		"	1~4mmの 砂粒を 含む	内外面とも 橙色	外面 タテ方向のハケ目 内面 タテ方向のヘラ削り
7-5	"	"	SB-1 上部	底径 4.0cm	3.9cm 以上		"	1~4mmの 砂粒を 含む	内面 褐色 外面 橙色	外面 底部に指圧痕を残す 内面 斜めにヘラ削り
7-6	"	壺	"	底径5.8cm 胴径5.7cm	14.6cm 以上		"	砂粒を 含む	内面 黒褐色 外面 橙色	外面 タテ方向のハケ目 外面 底部にタテ方向の、胴部に ヨコ方向のヘラ削り
7-7	土錘		SB-1 P1				良好だ がやや 軟質		内外面とも 橙色	全長 3.4cm 幅 1.6cm 重量 0.5g
8-8	須恵器	小壺		8.0cm	4.6cm 以上			1~2mmの 砂粒を 含む	内外面とも 灰色	内外面ともクロコナデを施す
8-9	土師質 土器	杯	P3	底径 5.0cm	1.4cm 以上	右回り		小砂粒を 含む	内外面とも 橙色	底部 回転糸切り
8-10	土師質 土器	"	SB-2 P2	底径 5.3cm	1.5cm 以上	"		"	"	"
8-11	白磁	小杯	P4	口径7.2cm 底径2.8cm	3.4cm				乳白色	
8-12	青磁	碗	茶褐色 粘礫土	底径 5.5cm	3.1cm 以上				内外面とも 明緑色	底部外面に1条の界線 内面にも毛彫による文字あり
8-13	土師器	甕	SB-01 上部	19.4cm	3.7cm 以上			1~2mmの 砂粒を 含む	内外面とも 橙色	内外面に横ナデを施す
8-14	"	甕	茶褐色 粘礫土	22.0cm				1~3mmの 砂粒を 含む	"	外面のタテ方向の、内面に横方向 のハケ目を施す
8-15	"	"	"	21.6cm	5.2cm 以上			0.5~1mm の砂粒を 含む		内面に横方向のハケ目を施す



第7図 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図

Ⅵ ま と め

楠目小学校移転改築工事に伴って実施された今回の発掘調査では、掘立柱建物址、柵列、井戸、溝、不整形土壇、柱穴、ピットが検出され、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、青磁、白磁、砥石、土錘などの遺物が出土した。調査で得られた成果と問題点にふれてまとめたい。

- (1) 調査対象地に計19ヶ所のトレンチを設定し、発掘を行った結果、T-8～11において遺構が検出され、T-9～11から弥生時代～平安時代、戦国時代、江戸時代に属する遺物が出土した。
- (2) T-9では不整形土壇、ピットが、T-10においては江戸時代に形成されたと考えるSD-1、SE-1が検出され、また、T-11からは奈良時代末～平安時代前半に所属時期が求められるSB-1、SA-1に加え、戦国時代に属すると考えられるSB-2が検出された。
- (3) SB-1は、桁行6間（総長12.80m）梁間2間（総長4.15m）の東西棟の建物で、間仕切をもち、東側には目隠塀と考えられるSA-1が所在する。奈良時代～平安時代前半に形成されたものと考えられ、この時期の集落跡が発掘区東側周辺に形成されているものと推測される。奈良時代～平安時代の建物址としては、土佐山田町では初めて確認された遺構であり、律令期の様相を探るうえで良好な資料を得ることができた。
- (4) SB-2は、桁行4間（総長6.9m）梁間2間（4.9m）を測る南北棟の建物である。柱穴方内から、糸切り底の土師質土器が、また遺構覆土中から青磁碗が出土したことから、戦国時代に形成された建物址であると判断される。

SB-2は、「下タヤシキ」の小字名をもつ土地から検出されている。調査対象地の東側、北東側の土地の小字名は「大西土居」、「土居」で、また、西側、北西側には「市ノ下」、「東市」、「西市」の小字名が土地に冠せられており、発掘区周辺は戦国時代末期の地方的中心集落であった山田市の所在地であると推測されていることから、SB-2は市屋敷に関連した建物址である可能性が強い。また、遺構の検出状態からみて、発掘区の東側（「大西土居」の小字名をもつ土地）⁽²⁾への遺構の広がりが指摘される。

- (5) 今回の調査で、奈良時代～平安時代、戦国時代に位置付けされる建物址が検出されたことから、標高42.50～43.00m前後を測る長岡台地段丘平坦部において遺構が形成されていることが明らかとなった。検出された遺構は、集落跡の一部と考えられるものであり、発掘区的位置は集落の西側縁辺部に位置するものと考えられる。

註 (1) 前田和男 「長宗我部地検帳と山田」『山田町史』 1980年 土佐山田町

(2) 小林健太郎「戦国末期土佐国における地方的中心集落－香美郡山田市の事例研究－」『歴史地理研究と都市研究上』

版 圖



T-10 (北から)



T-9 遺構検出状態 (南東から)



T-9 遺構検出状態（北東から）



同上 完掘状態



T-11 調査風景（北から）



T-11 遺構検出状態（北から）



T-11 調査風景（北から）



T-11 調査風景（北西から）



T-11 井戸跡検出状態（西から）



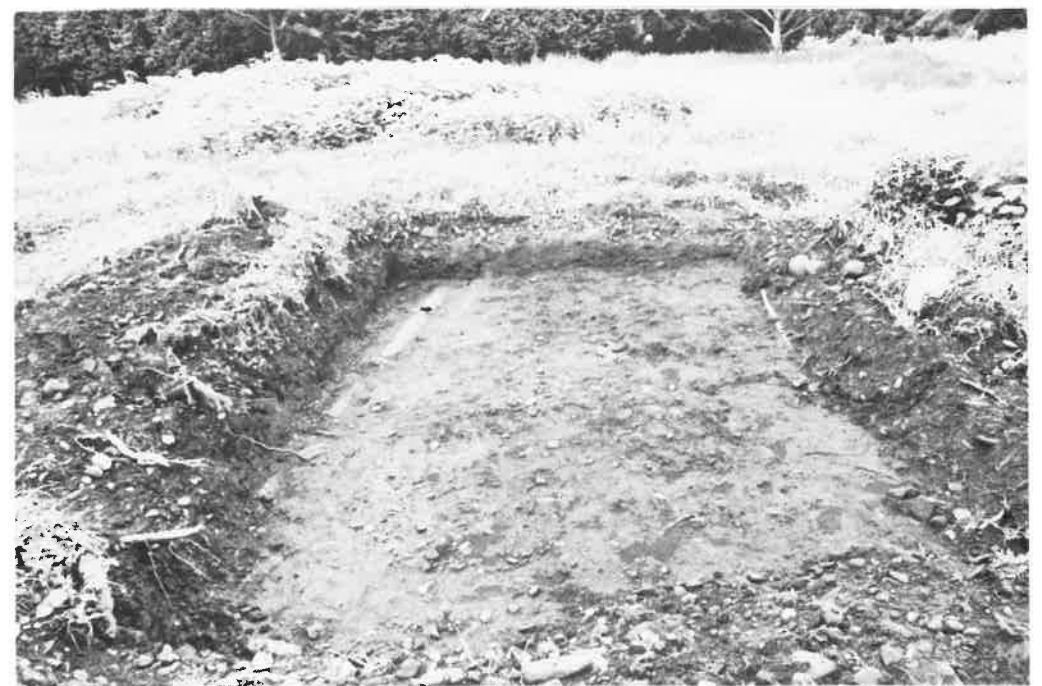
T-11 東側（北から）



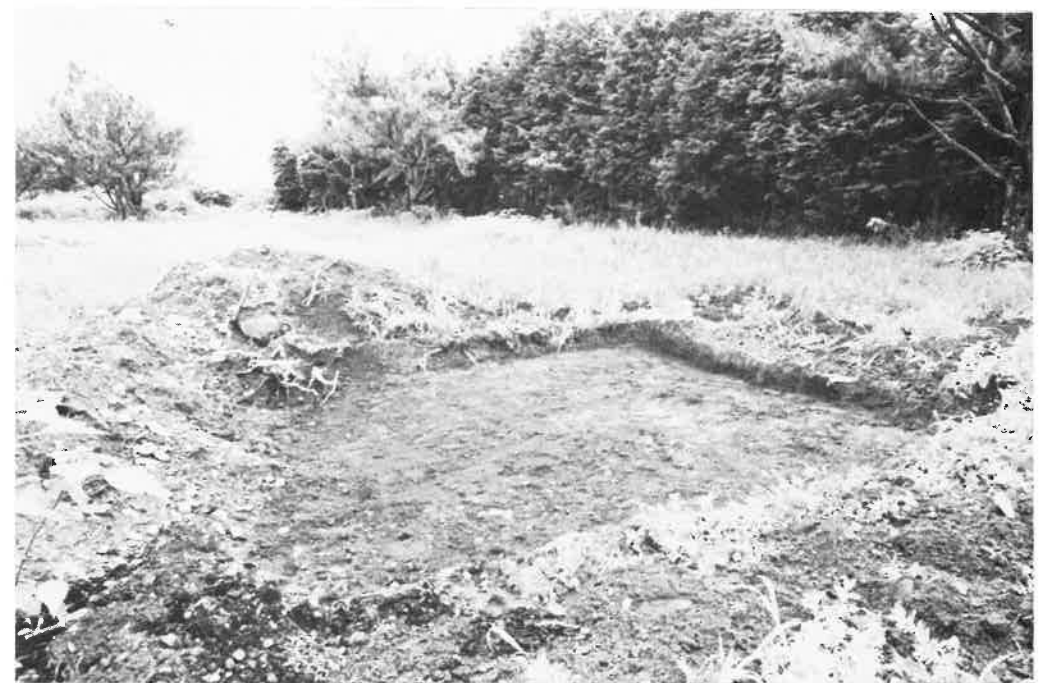
T-11 SB-1 (西から)



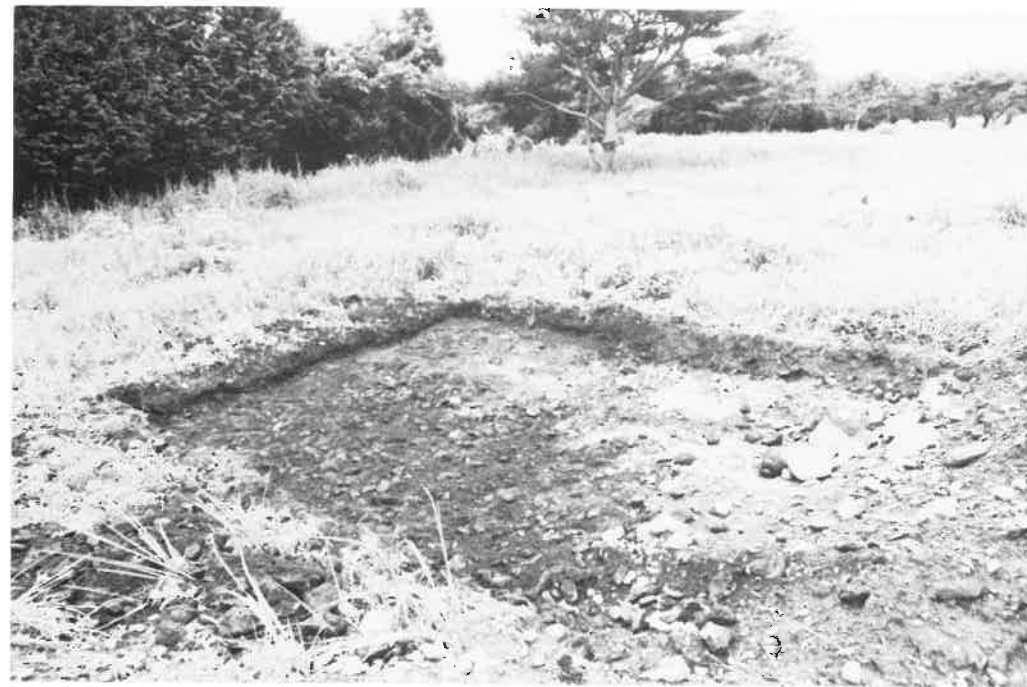
T-11 全景 (北西から)



T-3 (北から)



T-4 (北西から)



T-5 (北東から)



T-8 (南から)



T-12・T-16 (北西から)



T-12 (北東から)



T-12 (南東から)



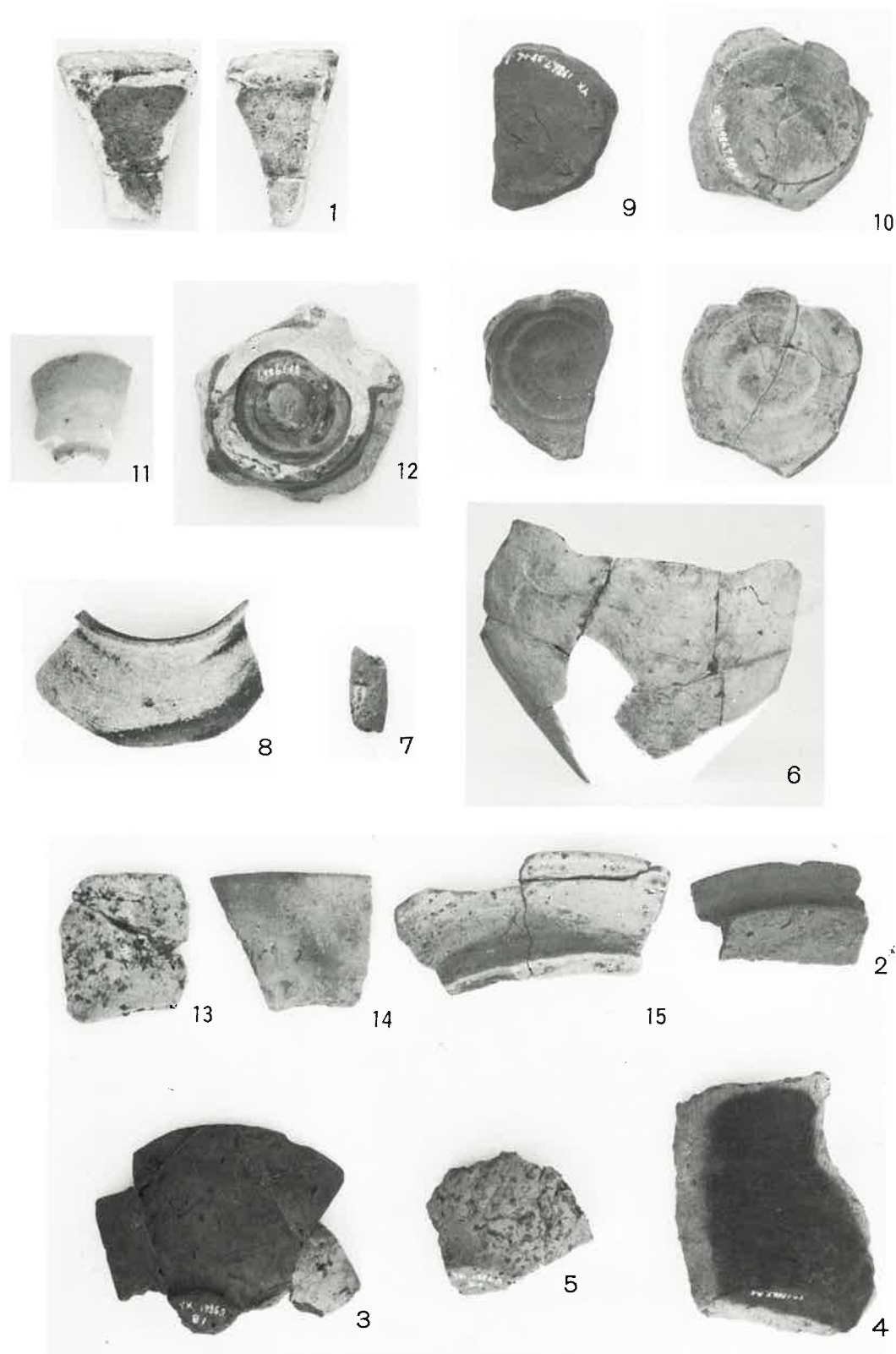
T-14 (東から)



T-15 (南東から)



T-16 (南西から)



出土遺物

楠目遺跡発掘調査報告書

1988年3月

編集・発行 土佐山田町教育委員会
土佐山田町宝町1丁目2-1

印刷 有限会社 小松印刷所
土佐山田町西本町1丁目